

# 異空間と文学

## 赤祖父哲二

宮沢賢治は「異空間」ということばを使っていた。メモに「異空間の实在」と記し、詩「阿耨達池幻想曲」では「虚空こそ/ちがった極微の所感体/異の空間への媒介者」とうたった。いったいこの「異空間」とは何だろうか。

『インドラの網』に登場する旅人は、「人の世界のツェラ高原の空間から天の空間へふっとまぎれこみ」、「天の空間は私の感覚のすぐ隣りに居るらしい」と思う。旅人はまぎれこんだ天の空間で、壁面に描かれていたはずの天の童子に出会い、ことばを交わしながら燦然と輝くインドラの網を見る。

『銀河鉄道の夜』の終わり近くでは、溺死したカムパネルラが天の川の真っ黒な穴（石炭袋）に消え去ってゆくことが暗示されている。これはその作品では異空間と呼ばれてはいないが、天すなわち銀河系空間を異空間とするなら、異空間の奥にあるもう一つの異空間だということができる。賢治自身は明示していないけれど、民俗学でいう死者の靈魂が住む「他界」のことかもしれない。

石炭袋は今日の宇宙科学において暗黒星雲と呼ばれ、生命の原基が渦巻いている世界だとされている。賢治がこのことを知らなかったのは事実であるにしても、死んだはずのカムパネルラが友人の心のなかに生きている、あるいはいつの日か何かに生まれ変わるだろうと読者に思わせるのだから、賢治はまったく不思議な詩人だというほかはない。彼の作品は異空間抜きに語れない。

また、今日の宇宙科学は、地上と異空間は素粒子の大きさほどの通路で結ばれ、しかもその通路は身のまわりのどこにでも開かれていると説いている。古

代人や詩人の直観と現代科学の不思議な一致だといいたくなる。

ともかく、異空間にしる他界にしる、その実在の証明は科学にまかせることにして、ここでは古代人や詩人の直観による発見のほうに注目することにしよう。はっきりいえるのは、異空間や他界は賢治自身においても宗教においても民俗信仰においても多様であって、下手な定義などはねつけることである。靈魂の住む場所であろうし、人間の感覚のすぐ隣にある場所でもあろう。

ある意味で、その多様性の理由は単純明快である。それが心の所産、つまりイメージにほかならないからである。科学的証明はともかく、たとえ目に見え手で触れえなくても、その実在性、すなわちそれがリアルであることは、睡眠中の夢と同じく経験として否定できない。

しかし、その実在性が単純明快だとはいえ、人間にとって決定的ともいえる障害は、その表現媒体の限界にほかならない。言語、音、形象、色彩など、どれも一長一短である。もちろん、表現媒体どころか、人間の五官と知性そのものが万能ではない。獣や鳥と比べると、ある点ではきわめてすぐれているが、別の点において著しく劣る。これが天の公平な配剤によるのか、DNAの戯れによるのか、それこそ天のみぞ知るであって、「人間にとって決定的ともいえる障害」などと書いたばかりの言を取り消さなくてはならない。傲慢にもほどがあるからである。

死後の世界を信じるか否か、靈魂の実在を信じるか否か、二者択一を求めるのは空回りにすぎない。現世にこだわった孔子が生の世界を知り尽くせないから死を語らぬといったのは、人間の知性と感性と表現媒体の限界を示唆する点では正しいけれど、人間は生の世界を知り尽くせないからこそ限界を越えようとするのではないか。怪力乱神を語るのも生の営みである。

人間の限界を越えるあがきこそ文学や他のさまざまな活動にほかならない。ただ、生の反対概念として死を単純に対置させるゆえに混乱が起こる。死は生に含まれ、生も死に含まれている。夢の跡にすぎない夏草の繁りが示すように、生と死は互いに他を包みこんでいるともいえる。

DNAが生き続けるのだから、肉体と精神も生き続けるといえる。昨今では

肉体は物になりさがり，その死も心臓死と脳死をめぐって争いを生んでいる。そのうちに精子死や卵巣死さえ問題になろう。さらに，自然にたいする超自然の対立も思考硬化の元凶である。

異空間は感覚のすぐ隣にある。文学はその主要な一つにほかならない。人間はみずからダイナミックな異空間を創造し，その内と外で反転をくり返している。——「まずもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばろう」。